

巻頭言

私と山形 く心に残る深い縁

前NHK会長 川口 幹夫



人には故郷が三つある。一つは生まれ故郷、二つ目は育ったところ、そして三つ目は何か心に残る、深い縁（えにし）で結ばれたところ。

私の場合は、一は東京である。二は、育ったところ鹿児島だ。そして三つ目にあげたいのが東北、山形である。

山形という土地にひかれたのは青年時代だ。私が旧制中学を卒業したのは昭和十九年、折から太平洋戦争の終盤で、我々の前には兵役、そして戦死というコースが待っていた。

その中で旧制高校の文科に入ろうと私は考えた。どこがいいのか？いろいろしらべた。ロマンチックな思考をする私には、北の国が魅力だった。弘前か、山形か、うーん松本もいいな。結局家庭の事情から地元、鹿児島にしたのだが、あの時、山形をうけたらどうなっていただろうか。

昭和二十五年、大学を卒業した私はNHKに入った。福岡勤務のあとテレビとともに東京に移った。担当は音楽である。歌は生きている」という番組を作った。その何回目かに「思い出の高校寮歌」というのを放送した。山形高校卒業生の神津さんという医師が、山形高校をやってくれといった。

一高、三高、北大予科の寮歌につづいて山形高校寮歌が出た。牧歌調で、いかにも山形だった。

時は移って、私はNHKの放送総局長になっていた。同期の土居という男が、山形の局長だった。彼は山形に何のゆかりもなかったのに、局長を終わる時は「山形に永住しよう」となっていた。定年

になって彼は志通りに山形郊外に一軒を求めて小さな店を開いた。訪ねて行った私を迎えて彼は「山形はいいよ。ほんとにいいよ!」といった。

そのことば通り山形を舞台にしたNHKドラマ「おしん」は大ヒットした。あのドラマの始まった時は総局長だったが、試写室で私は感涙にむせんでしまった。私のうしろで見ていた演出の面々は「うん!これは当たる!」と感じたそうだ。

雪の降りしきる最上川をくだつてゆくおしん、それを追いかける母、私の目は涙でくもった。銀山温泉そして酒田の商家、「おしん」の風景のいくつかはまだ私の心に鮮明に残っている。

NHKの会長をやめたあと、私は二、三の仕事をした。その一つに瓜生山学園の理事、というのがある。京都の北白川にある大学でメインは京都造形大学だが、その姉妹校に東北芸術工科大学がある。

理事としてこの大学を訪問した。大学は、山形市の郊外にある。素晴らしい環境の学校だ。学校は能舞台をもっている。私は感動した。ドラマ時代から親しくしている藤村志保さんがいる。志保さんに頼んで、この舞台で地唄を舞ってもらおう。

この約束はまだ実現していない。自然に恵まれ人情に恵まれた、きつと素晴らしいものになるに違いない。

山形は今、私にとって限りなく故郷に近いものになっている。とうとう山形に住みついてしまった友人の土居の心境にどうやら私も近づいてきたようだ。